

連載講座

第44回

天文学者と柿の木・高橋至時

作家 童門冬二

信用を失った幕府製の暦

宝暦10(1760)年5月1日に日食があった。しかし幕府天文方発行の暦には、正しい予測記事が書かれていなかった。3年後の宝暦13(1763)年9月1日また日食があった。この時も幕府発行の暦にはキチンとした予測記事の記載がなかった。

二度の過失で幕府の暦は信頼を失った。特に民間の天文好きは一斉に抗議した。それは大坂の天文学者が、二回の日食をピタリと予測していたからだ。予測者は麻田剛立(あさだ・ごうりゅう)といった。豊後国(大分県)の生れで子供の時から“神童”の名をほしいままにしていた。特に天文に関心を持ち、独学で天文学を修め、大坂に出て医者になった。「医業で天文学を学ぶ資を得る」という生活を営んだ。

しかし医業よりも天文学で名を馳せ、弟子入りをする者が多かった。高橋至時(たかはし・よしとき)と間重富(はざま・しげとみ)は特に有名だ。

二度の失敗ですっかり信用を失くした幕府は「改暦」を思い立った。しかしその時の天文方(現在の気象庁)役人を信用せず、麻田に依頼した。麻田は、

「ありがたい話だが、すでに老令で任を全うできない。代りに弟子を使ってほしい」

と高橋至時と間重富を推せんした。至時は大阪城勤務の同心(下級役人)、重富は店を11軒も持

つ質屋だ。至時は内職に傘を張ったり楊子を削ったりしなければ食えない貧乏役員、重富はあり余る余財を新式の測量機械に投ずる富商だ。至時にはすでに数人の子供もいた。

幕府は剛立の意見に従って二人を江戸に招致した。東下りをした二人は浅草の暦局に勤務することになった。至時は、

「江戸へ行っても家族全員は養えない」

といてて単身赴任をすることにした。出発の日、庭に出て隅にある柿の木の切株をいとおしげに撫でた。そして、

「この木が無事なら、おまえたちのくらしに幾分役に立ったのに」

と未練気にいった。

至時のいうように、切られる前の柿の木はかなり高橋家の家計に寄与していた。秋になって実る実は美事で美味だった。“高橋家の柿の実”は周辺に有名で、実には結構な値がついた。だから至時は家人に、

「大切に育てるように」

と口やかましく注意していた。剛立の所で天文学を学んでいる時も柿の木のことが頭から離れない。特に実がなるころは盗みにくる者のことが気になって仕方がない。普段から狙っていて、家人が外出した留守に柿の実を盗む人間の姿が、嫌でも脳裡に浮ぶ。そうなると次第に勉学にも身が入らなくなる。天文学は数学が多いからそんな状況では、どうしてもおろそかになる。

やがて師の剛立気づく。
「高橋、どうした？」
と訊く。至時は慌てて、
「何でもありません」
と否定するが、剛立は至時の反応をみて、
（何でも無いはずはない。きっと何かある）と感じた。

新曆誕生の苦難

そこである日、至時が城へ勤務している時を狙って自宅を訪れた。

「近頃ぼんやりすることが多い。何か屈託事があるのか？」

と至時の妻に訊いた。妻は狼狽した。良妻賢母の噂が高い女性だ。恩を受けている師なので、かくしきれずに柿の木の話をした。庭に出て柿の木を見た剛立は、

「実に美事な木だ。しかしわしの大事な弟子を悩ませるのは怪しからぬ」

と呟いた。そして木を睨みながら凝っと考えた。やがて至時の妻をふり向いてこういった。

「この木を伐って下さい」

「え！」

妻はびっくりした。この先生は何ということをお願い出すのだろう、と呆れた。

「そんなことはとてもできません。この木は……」

いい淀む妻に剛立はいった。

「柿の実のことはわしも知っている。だからこそ伐ってほしいのだ」

「でも……」

妻は胸が一杯になり、情ない気持が眼に涙を浮べさせた。剛立にはその妻の気持がよくわかった。

実の成る時期には妻は特に緊張して柿の木の監視をいいつけられているに違いない。にもかかわらずその木をいきなり伐れといわれて、妻はどうしていいかわからなくなったのだ、柿の実までもくらの資に加えなければならない、貧乏役人の辛さが一挙に押し寄せたのだ。

今日までがまんがまんを重ねてきた。そのがまんの堰が崩れ、堰き止められていた忍耐の堆積物がドンと溢れ出たのだ。妻自身が今までどれだけこの木を伐ろうと思ったか知れない。

（夫に何という情ない思いをさせるのだ）

と、妻は柿の木を憎んでいた。剛立にいわれなくても、妻は毎日この木を伐りたいと希っていた。妻は学究の徒である至時を尊敬し愛していた。だから純粹に天文学に没頭してほしいと希っている。柿の木はその夫の純粹さを濁らせる。憎い存在なのだ。

至時の妻の混乱ぶりに剛立は同情した。しかしここは鬼になっても乗り切らなければならない。剛立はいった。

「ただで木を伐ってくれといっているのではない。柿の実は来年の分までわしが買う」

「……！」

妻は驚いて剛立を凝視した。剛立は温かい笑みでその凝視に堪えた。剛立自身にそんな余裕はない。剛立自体が貧乏学者なのだ。

以下は筆者の推測だ。この時の剛立はおそらくもう一人の弟子重富のことを頭に浮かべていたに違いない。

（重富に工面してもらおう）

と考えていた。柿の木は伐り倒された。家に戻って庭を見た至時は呆然とした。おそらく至時は怒り狂っただろう。この話は、「至時の妻の内助」の美談として残されていて、この時の家庭内トラブルについては触れていない。

江戸の天文方役所では、至時は面目を潰された従来の所長や古参たちのいじめに会う。それを乗り越えて、“正しい曆”の製作に努力する。その助長剤になるのは、従来学んできた中国の古い理論でなく、オランダの新しい理論で“地動説”にまで及んでいく。が、これは別の話になる。

けなげな妻は、江戸に呼ばれる前に大坂で死ぬ。武士社会の身分や家格の問題は、優れた天文学者をパワハラで追い廻した。